

ラブライブ！サンシャイン！！ 小原家の使用人！！

ぱすえ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

浦の星女学院理事長兼スクールアイドルAqoursのメンバー小原鞠莉には、幼き頃から腐れ縁の1人の使用人がいた。その者の名は、サトウ（偽名）!!

この物語は、2人の戦い?の記録と、小原家の使用人サトウが見てきた、小原鞠莉と言う女の子の成長譚である!!

※第3話以降、新規書き下ろししました。よろしくお願いします。

目次

プロローグ!!

小原家の使用人、クソガキ共を探す!! | 1

第1章じゃじゃ馬お嬢様とアラサー（間近）使用人

小原家の使用人、母娘と奮闘す! | 16

小原家の使用人とお嬢様をお願い! | 27

小原家の使用人と大怪獣ハグウ!! | 39

覚悟と責任 前編 | 51

覚悟と責任 後編 | 60

第2章 2年ブウリデスネエー（アニメ本編）

小原家の使用人と新理事長!?! | 69

プロローグ!!

小原家の使用人、クソガキ共を探す!!

誰かが呼んでるような雨上がりの午後……

水溜りの水を盛大に跳ね上げ一台の自転車が内浦の海岸沿いの道を駆け抜ける。

その自転車（ボディフレーム：ステンレス製 変速系統：内装3段 要約・クツソ重いママチャリ）を漕ぐ者は、スーツを着た男だった。その男は、まるで鬼の能面をつけたかのような形相をしていた。さらには跳ね上がる水でスーツがビツシャビツシャに汚れようともペダルを回す。

「あああんのお クソガキアアアア!!! 今日という今日は許さねえええ!!!」

内浦の海岸沿いに穏やかではない叫び声がこだまする。

……この側から見ればかなり危ない部類に入る男。

名をサトウ（偽名）といい。

年齢 20才 職業 小原家使用人

ただ今、絶賛クソガキ3人組を追跡兼捜索中なのである。

同刻

―内浦の海岸沿い近く―

「ね、ねえ2人共?今なんか変な声聞こえなかつた?」

「いいえ、変な声は聞こえてませんわ。わたくしが聞こえたのは今の果南さんの声だけですわ。」

「んー？ そうネー。そんな声聞こえてないよー果南♪ねーねーそんなことより！今日は何して遊ぶ？ダイヤ！果南！」

そんな会話をしながら歩く、松浦果南、黒澤ダイヤ、小原鞠莉の3人。

そう、彼女達こそ先程、小原家使用人がクソガキ3人組と言っていたものの正体である。

そもそも、なぜ彼女達が、「クソガキ」などという蔑称で呼ばれているのは、とある訳があるのだが…それは後ほど語られるであろう。

「……気のせいかな？ そーだなあ…!?ッ　いいこと思いついた!!」

歩き始めた果南が、何やら思いついた様に、二人に声をかける。

今日は午前中雨が降っていたので、外で遊べなかった分色々溜まっているのだろう。

いつもの3倍増しの元気の良さで、2人に声をかける。

「隠れ鬼やろう!!」

「…隠れ鬼ですか？」

「ホワイ？ 果南、かくれおについて何い？」

説明しようッ!!

隠れ鬼とは、かの有名な”かくれんぼ”と”鬼ごっこ”が融合し誕生した遊びである。

ルールは簡単。逃げ手は、最初かくれんぼの要領で隠れ、もし鬼に見つかったらタッチされるまで逃げる。

鬼は、逃げ手を見つけタッチする。

というものだ。

しかし……

「果南さん…申し訳ないのですが、3人という少人数では鬼の負担が…」

ダイヤが言う通り、これを少人数でやろうとすると、高確率で鬼が1人になる。

これがどう言うことかと言うと、

鬼という役は休む暇なく、見つけると追いかけると言う動作を終わるまで延々と続けなければならない。

これが2人などの複数人ならば、負担は分散されるが、1人の場合負担は分散することなく全てのし掛かってくる。

つまり、鬼になったら最後。

持てる体力を全て総動員し、さながら獲物を追いかけるライオンの如く早期に勝負を決めに行かなくてはならない。

だが、この特性を”外遊びマスター”と小学校で影ながら称される松浦果南が知らないわけはなかった。

「むふふ！ ねえー鞠莉？ 今日のお迎えって”あの人”だよね。」

「うん。サトウが迎えに来てくれることになってるよー ねーねー果南。かくれおについて言うのを早くやろっ！」

「ま、まさか…果南さん…貴方って人は…」

ニタアとどう見ても悪いことしか考えていない様な笑みを浮かべる果南。これから遊ぶ隠れ鬼なるものに興奮する鞠莉。そして、何かを察し若干引き気味のダイヤ…

「よおおおし！ 鬼は、鞠莉んちの使用者さんッ！ 今日頑張つて5時過ぎまで粘ろうお!!」

「おー!!」

「…果南さんまだ、あの時の事を根に持っているんですね…」

こうして、小原家の使用人 vs まりだいなん3人組の壮絶なる隠れ

鬼の幕が切って落とされたのである。

一方その頃

そんな事など一切知らない使用人は、沼津某所で死にかけていた

……

ーサトウsideー

「ゼエ…ゼエ……マジであいつらどこ行きやがった……」

俺は坂道で自転車に身を預けくたばっていた。

ただでさえ思い自転車を漕ぎ、激しい有酸素運動を行なっているため、全身汗だくで息絶え絶えだ。しかも、目は死んだ魚の様に虚ろになっており、最早希望もクソもない。

なぜこの様なことになってしまったのか？

それはちょうど、2時間前……

ー小原家にてー

俺は焦っていた。

今日のちようど昼前あたりであつたらうか、主人の愛娘である鞠莉が通う小学校から連絡があつた。

なんでも、担任の先生に急遽出張が入り午後の授業が無くなったらしい。

そのため、お嬢様（鞠莉）を迎えに行こうと車を出したが、

よりにもよって今日、小原家の公用車が天に召されていたのだ。

……天に召された原因（昨日の鬼ごっこで、俺のサーチ能力に秒殺されまくったお嬢様がやけを起こして、車の排気口にじんじん突っ込んだことに起因）は割愛するが、とにかく車が使えなくなった俺は、仕方なく小原邸の隅に転がっていたママチャリを手にし、迎えに行ったのだ。

まあ、そんなこんなで学校へと着いた俺であったが、そこには、お嬢様の姿はなかった。

瞬間、

ツウッ

背中に冷たいものが走る。

まさか……誘拐でもされたんじゃ……

決してありえない話ではない。

鞠莉お嬢様は、お世辞ではないが小学生とは思えないほど容姿端麗、かつ外人特有の色っぽさがある。

もしかしたら、そこら辺のゲスな男達に金銭的といわゆる性的な目的で……

「お、お嬢様あああああ!!!」

耐えようもない不安と自身の非力さに頭を抱え学校の校庭に崩れ落ちる。

そんな、俺の様子を見かねた1人の女性教師が慌てて駆けつけてくる。

姿から見て、新人だろうか？薄く化粧をして小綺麗な服を着てやる……

「小原さんの保護者の方ですよ？小原さんなら大丈夫です！先程、松浦さんと黒澤さんと一緒に遊びに行くと言ってこの学校を出たばっかりです。」

ゴンツツ

頭を鈍器でフルスイングで殴られた時と同じぐらいの衝撃が襲う。そして、ギギギ…と音を立てながら首があらぬ方向へと向き、女性教師を睨みつける俺。

「なん…で……」

「へっ???」

「なんでええ!!よりもよってそこらへんの誘拐犯よりもタチの悪い彼女達にいい？お嬢様を預けたんですかあ??」

「ひいいツツ!」

腹の底からうねる様に出てくる陰湿な声に、女性教師は悲鳴をあげる。

ズリイ…

俺は、まるでゾンビの様にその場から立ち上がる。ぐちゃぐちゃになった校庭の泥が俺のズボンからずり落ち嫌な音を立てた。

そして、ピクピクっと痙攣している顔の表情なんとか直し、満面の笑みで女性教師に近づく。

「申し訳ありません。どうにも素が出てしまいました…:それで、お嬢様はど・ち・ら・にいい?」

「あばばばばば!!」バタツ

女性教師がそのまま、泡を吹いて倒れる。

…:そんなおっそろしい顔してたのか俺?

まあともあれ、お嬢様は、ハグウ&mp;デスワー（奥様命名）の2人と一緒にいるという事が分かった。

その為、あの3人組がいつも遊んでいそうな場所をしらみつぶしに見て回った。

そして、今現在に至る。

「クツソオオオオオ!! なんでもだよ、居そうなところ全部回ったのに、一回たりともかすりもしねえ……」ガチャンツツ!!

そう叫ぶが状況は一変する事なくただ時が過ぎていく。

もう疲れたよ……パトラツシュ……

俺はバランスを崩し、寄りかかっていたママチャリ（パトラツシュ号 つい先程命名）がぶっ倒れる。それに身を預ける様な形で、俺も地べたに突っ伏す。

あの3人：つまり、お嬢様である小原鞠莉を含めた、ハg……松浦果南、黒澤ダイヤは溢れる元気と人一倍の行動力を持っている為、捜し出すのは大変である。

しかし、ここまで捜索時間が長引いたことは過去に1回も無い……普段は、今まで見て回った数ヶ所の彼女達の遊び場いずれかに居るはずなのだが、今回はそれらの場所に居なかった。

……なんだろう。意図的に避けられてるとしか思えない。

肉体的はボロボロだが、まだ辛うじて動く頭でそう必死で考えていると、

「ねーねー！ 次何処行く？」

「そうだなー」

「ここら辺となると……難しいですわね」

何やら誰かの話し声が聞こえてくる。

なっ!? 人か?

今の状況、つまりは、チャリと共に地べたに寝転がっている俺の姿は、どう見ても普通では無い。

ガキ共を追ってる途中疲れ果ててぶっ倒れましたー。というこんな姿見られた暁には末代までの恥、いや…そんなくらいで済めばまだいいだろう。

ならば、取るべき行動はただ一つ

やべえ…どうにかして隠れねえーと…

不幸中の幸か、側に身を隠すのに丁度良い茂みがあった為、残る力を振り絞り、芋虫の如く動きながらそこに身を隠す。

なお、自転車に関しては最早引っ張る気力がなかった為放置である。

…頼む!! 見つからないでくれツツ!!

年甲斐もなくギユツと目を閉じて都合のいい時しか信じた事がない神に願う。

タツタツ!!

足音が近づく。それとともに、俺の緊張は頂点に達した。

ドックドックと、とてつもない音を立てながら暴れまわる自分の心臓の鼓動を感じながら足音が過ぎていくのをだだひたすら待つ。

が、

「ん? なんだろうこの自転車…」

…しっ、しまったあああ!!!

通行人の1人が放置された自転車に気づき、あろうことか、こちらの茂みに近づいてくるではないか。

放置自転車くらい無視しろよ!!田舎じゃ日常茶飯事な案件だろうが!!

そんな心の叫びも虚しく、他の通行人もこちらに寄ってくる。最早年貢の納め時、そう覚悟した瞬間、思わぬ奇跡が起きた。

「これは…いわゆる放置自転車と言われるものですわ!」

「ほーちじてんしゃ?ダイヤーどういう意味なの?」

「路上に放置…つまり、自転車を駐輪場などの公的なスペース以外の場所に置き、そのままにすることですわ!これは違法駐輪と同じく都市部でも問題になっていて、歩行者や車の交通を妨げるものとして厳しく取りしまわれているのです。」

まあ…要するにゴミですわ!」

「oh…:…そうね、ゴミはゴミ箱に捨てないといけないわ!」スツ

「あー、触っちゃダメだよ鞠莉。コレ見るからにはっちいし、汚いよー。」

…:…探し求めていた奴らが俺の目の前に現れた。しかも、ご丁寧に俺の愛車をボロクソ言ってくれるではないか。

散々手こずらせてくれやがって…:

ただですむとおもうなよお?

腹の奥底から真っ黒い感情が込み上げ、さっきまで、死にかけていた体と頭に嘘のように活力がみなぎってくる。

同時に、ニヤリツつと自身の口角がアホのような角度で引き上がるのを感じた……………

子供というのは、一度物事に関心が移ると中々飽きないものだ。

そして、その時間がサトウに悪智恵を働かせてしまうとは彼女達は夢にも思わなかっただろう。

一方3人はというと、そんな事はいざ知らずダイヤは目の前のゴミの処理について考え込み、果南と鞠莉は木の枝やら草やらで、自転車をゲシゲシと小突いている。

……ダイヤはともかくとして、幼年く小学生辺りの性として、道端に落っこっている汚物を何かで突くというのは避けられないものなのであろうか？

さて、そんな事はどーでもよく。

ゲシゲシ「……………?……………ツツ!!」

ふと、鞠莉が自転車にあるナニかに気づきゲシゲシと小突いていた手を止める。

そんな鞠莉の急な変化を不思議に思ったのか、果南が声をかける。

「あれ? どうしたの鞠莉?」

「も、もしかしたらコレ……………」

若干鞠莉の手が震えているのは目の錯覚であろうか？

「サ、サトウの自転車かもしれない……………」

「ツツツツツ?!!」

カタツ…コロコロ……

果南の手から小枝が落ち、ダイヤの顔から笑顔が表情が無くなる。

「に、逃げよう!!行くよ!2人とも!!」

「待ってください!」

果南が急いでその場から立ち去ろうとした瞬間。ダイヤが叫ぶ。

「ここに鞠莉さんの使用人の方の自転車……何か引つかかりますわ……」

「ちよつと待ってよ!!今そんな事言ってる場合じゃないって!逃げないと見つかつちゃうよ!……?」ピタア

変に考え込むダイヤをやや焦り気味で急かす果南。

そんな彼女の足に何か生温かい物が触れる。

そして、それを疑問に思った果南が足元を見ようとした瞬間。

ガサアツツ!!

茂みの中から音が聞こえ、ビクツと3人の肩が跳ね上がる。

その隙に何者かが果南の足とダイヤの足をガツシリと掴む。

そして…茂みの中から白いビニール袋を被った、泥だらけのスーツの怪人が這いずり出てきた。

「く あ w せ d r f t g y ふ じ こ l p
!!」

更に、その怪人は奇声をあげながら体をくねらせ、2人を茂みの中に引きずり込もうとする。

「ぎゃああああああああ!!!」

「ピイギアアアアアアアア!!」

涙目になりながら悲鳴を上げ、まるで、某ホラー映画のように排水溝と言う名の茂みに引きずられていく2人。

一方、生き残った鞠莉はと言うと、何かを察したのか表情は冷めきっており、周りに何かを探し始めた。

さて、

茂みに引きずり込まれそうになっている2人はギャーギャー騒ぎ立てながら必死に足をバタつかせもがいている。

が、怪人へのそんな抵抗も虚しく、どんどんズリズリと引きずられてしまう。

「ぐへへっっ！ お嬢ちゃんたあちい 今の今まで小突かれていた自転車君と同じ目に合わせてやるから覚悟しろおよお?」

ねつとりとした気味の悪い声で2人を威圧する怪人。その声は恐ろしくもどこか楽しげであり、怪人のゲスすな心を表しているようだった。

「わたくしは小突いてなんか居ませんわ!!」

「ゴミ扱いたよね? ぼくちん許せえないなあ」

「嫌アア!! ルビイイイイイツツ!! せめて、せめて死ぬ前に妹に合わせてええ!!」

「ダ、ダイヤ！ 諦めちやダメだよ :グスツ うっ ううヤダああああ!! 誰か助けて!!!」

ただならぬ、危機的状況に取り乱す2人。

「ゲへへへ 散々手こずらせやがってザマアねえぜギャハハツツ!!
ハグウとデスワー打ち取ったr

「sh i t!!! サトオオオオオ!!」 なっ!?!?」

勝った!!

そう確信した怪人ことサトウに、鞠莉が突撃してくる。しかもその手には、結構太めの木の棒を持って…

「お、お嬢様ツ!?それはシヤレにならな……」

「shut up!!チエストオオオオオ!!」

「ま、待って!流石に調子乗りすぎちまい……ぐべえっ?!?!?」

ゴオツツ!!

木の棒がビニール袋にクリーンヒットし、鈍い音が周りに響き渡る……

こうして、サトウの逆襲、そして、3人と1人の隠れ鬼に終止符が打たれたのであった。

ゲシツゲシツ

全てが終わった後、3人は何かを執拗に蹴っている。

その何かとは、先ほどの戦いにおいて敗北した、小原家の使用人である。

彼女達は口々に言う。

「変態」「ロリコン執事」「変人ビニール仮面」……

あられもない人格否定の言葉が次々にサトウに刺さり、心を抉っていく。

完璧(?)な敗北を期したサトウにはもう立ち上がる気力すら無く、ただその報いを受けていた。

だが、心の底で思うのだ……

ああ、状況は酷いけれども……これはこれでありなのかもな
ともあれ、お嬢様は見つかった訳だしな

と……

数年後……

「サートーウ！早く車を出しなさい！high schoolの入校
式に遅刻しちゃうわ！」

美しい声が、小原邸に響く。

その声の主はもちろん我が主人の愛娘

小原鞠莉の声である。

「ハイハイ、んなに急かさんでくださいよ……なんたって俺はもう、3
0近いジジイなんすから。」

そして、それに少し気だるそうな声で返す使用人が1人。指の間
で、黒塗りの高級車の鍵をグルグル回す彼の名前は

小原家の使用人 サトウ

ワーワーと騒ぎ立てる主人のじゃじゃ馬娘に、使用人は悪戯っぽく
こう問いかける。

「お嬢様、高校入学おめでとうございます。しかしですね、高校に入っ

てからもまた松浦と黒澤の奴らと良からぬ悪巧みせんでくださいよ。

ほんとに：怒り狂った奥様止めるのも大変なんですからね」

「わかったー！」

「(ぜってーわかつちやねえなこの顔は…) 分かればよろしいですよ。後それと、入校式ではなく、入学式です。日本語をお間違えないように。」

「相変わらず無愛想ねー そのくらいいいじゃない！」

へいへいさいですか。 と、生返事をしながら、屋敷の外に停めてある車に乗り込み、クラッチを切りエンジンを掛ける。

「お嬢様ー。出発しますよ。」

「oh！ 早く行きませよー！」

新たな門出への第一歩といったところか、車に乗り込んでも、はしやぐ彼女を尻目にサトウは思う。

ああ、神さまどうかこのじゃじゃ馬娘を見守ってください。

どうか、万が一間違っても俺のようにならないでくださいと……

さてさて、冒頭長くなり申し訳ない。

この物語は、俺：つまり小原家の使用人サトウが見てきた、小原鞠莉と言う女の子の成長譚である。

そして、同時に彼女に……いや彼女達救われた名前の無い役の物語でもある。

第1章じやじや馬お嬢様とアラサー（間近） 使用人
小原家の使用人、母娘と奮闘す！

四月、それは多くの人々が新しい門出を迎え、そして新しい第一歩を踏み出す季節。

また、その季節の変わり目に浮かれついた一部の人間が奇行に走ったり、犯罪を犯したりなど気を抜けない季節でもある。

まあ、何が言いたいかと言うと……

小原家の使用人として働く俺、サトウも、周りの環境の変化に、一種の季節の変わり目を感じていた。

一番大きな変化はやはり、屋敷……つまり、ホテル・オハラ的事であるが、ここにもいわゆる新入社員と呼ばれる人間が入社してきた事だろう。

そんな彼ら彼女らを屋敷の家事洗濯、などをこなしながら、見ていてふと思う。

彼ら彼女らは、今。社会で一番大変な経験をするのだろうか。と、

なぜなら、学生時代とは打って変わり、何をするにも守ってくれる人など誰も居ない所で自分一人で戦わなくてはならないからだ。

なーんて偉そうなことを言っているが、かく言う自分もそんな呑気な事は言ってはられないのだ。

何故なら……

「奥様……いくら娘の入学式に出席されるとはいえその格好は少々派手では……」

「何を言っているの。サトー！ イタリアの社交場ではこのドレスはアタリマエー！」

No problem!!」

年中頭がお花畑+娘の事しか考えていないと言う「奥様」というモンスターを相手にしなければならぬからだ……

事の発端は、昨日。

夜の食事の時に、お嬢様（鞠莉）が発した一言であった。

「ネーママ！ 明日の入校式の事なんだけど…明日はママとパパは来なくて大丈夫だから!!」

元気よく、にぱあーとした笑顔で自身の両親にそう発言するお嬢様。

その言葉に、たまたまその場で配膳をしていた俺以外の人間の空気がスツと冷え切った。

旦那様の顔面はありえないほどに硬直し、まるで死刑宣告を受けた囚人のようになり、

奥様は煽っていたワイングラスが手から滑り落ち、パリイツンと乾いた音がたった。

…ぶつちやけ俺はこの時、

娘の一言でなんでこんな同様すんだ。あんたら……

と、これほどまでに率直に思った事はない。

「お嬢様、旦那様と奥様が固まっておられます。できれば何故そのような事をお言いになったのか、説明した方がいいと思います……」

あまりにも、娘の言葉にショックを隠しきれない2人が何のアク

シヨンも起こさないの、俺はお嬢様に助け舟を出した。

「えええだつてー、もう私明日でハイスクウーストウーデント（高校生）だよ！入学式くらいもう、ママもパパの付き添いなくても自分一人のできるよ!!」

なるほど……お嬢様の気持ちも分からんでもない。というか、俺にとつちやそれが普通の反応だと思う。

中3く高校生の子ども的心境として親から巣立っていききたいという気持ちが生まれるのは世の必然だ。てか、そういう気持ちがないと自立できない。ニートコース確定だ。

が、

それを許さないのが、この小原家……特に奥様。

おおー これはとんでもないバトルが繰り広げられそうだ……

そう直感した俺は、すぐ様配膳を済ませ、部屋を出て行くこうとする。が、配膳をし終えたところで、誰かに腕をぎゅつと掴まれた。

その正体は、この小原家の大黒柱そして、自分の主人の旦那様であった。

俺の腕を掴む旦那様のその目には、

・ 1人にしないでくれツ!!

・ 逃がさんぞ、貴様も道連れだツツ!!

という意図がしつかりと込められていた。

……どちらかと言うと後者の方が強い印象を受けたのは気のせいだろうか？

こうして俺は、不本意ではあるが、ココで働き始めていた頃から度々目にする娘 v s 母親の闘いの行く末を見守らなくてはいけなくなつた……

んんっ!! (唐突な咳払い)

結論から言おう、この宵の勝負。

お嬢様の勝ちであった。

この過程を話すとき長くなるため、割愛させてもらうが、要は、お嬢様ももう15才、自分の事は自分で決められる年になったと言う結論に至ったのだ。

それでも、奥様は食い下がらなかったが、旦那様の「明日には、めでたい事があるんだ。今夜はもうこのくらいにして寝よう。」

の一言でとりあえず終止符が打たれた。

だが、この間、短く見積もっても2時間。

いくら、俺が20代後半の男で体力があると言っても、その場はずっと直立不動はかなり応えた……

旦那様、いくら妻と愛娘の口論が怖いとはいえ、せめてその言葉をもうすこし早く言っただけ欲しかったです。

え？

じゃあなんで、今、奥様が入学式に出るため、かなり気合を入れていらっしやるのか？

あー、んなもん簡単な話ですよ皆さん。

お忘れですか？小原家は、ホテルだけでなく学校も経営してらっしやるんです。

つまり、奥様は、親として参加が拒否されたのなら、お嬢様が通う浦の星女学院の「理事長代理」として参加してやるという……

なんともまあー大人の権限をフルに使った様な事を計画していたんですねえ……

あの子どもあつてこの母親アリというもんですな。

ちなみに、本当の「理事長」である旦那様は、都合の良いこと(?)に今朝急に海外への出張が決まり、急いでイタリアまで飛ばなくてはならなくなつてしまいました。

……昨晩の夜遅く、廊下で奥様が携帯電話片手に

「仕事ー:job!!なんでも良いから早く作りなさい!!what?ツベコベ言わずに、シャチャョーフジンのorderよ!!」

と、叫んでいたのを見てしまったが、それが関係していないことを

切に願いたい。

さて、前置きが長くなってしまった。

とりあえず、今俺がやるべき事は、奥様の着ようとしている服の選定を済ませ、さっさと学校に送っちゃう事なんだが、これまた、社長夫人というのは服にうるさい！そして、庶民の感覚からズレてやがる！

先程、社交場に着ていくドレスと言っていたが、流石にそれにはストツプをかけた。

だってコレ……

「奥様、コレはかなりボデイラインが強調されます。そんな事せずとも奥様はお綺麗ですので、普通にこちらのスーツの方を……」

「あらあーアナタもわからない人ネー。だからこそじゃない！美しく着飾る事は淑女の嗜みよ!!」

げええ ……

やんわりとお世辞を込めながらスーツを勧めたのに逆にそれが導火線に火つけちゃった。

なんでこの人は、こんなにもボデイライン強調され、かつきわどい服装なんか選ぶのか……

クツソ……

このままでは奥様は兎も角、娘であるお嬢様が親の生き恥を見る羽目になっちゃう。

なんと少しでも止めねえと……

「……いやですから、奥様？日本のああいっただ式事では普通、和装かスー

ツと相場が決まっているんです。んなボディコン強調するようなもん着けてつたら完全にその場の空気から浮きますよ!!」

「オー… 目立って良いじゃない!!」

「(ちげえええ!!俺が言いたい事はそういうことじゃあねえええ! テメエの格好は常識の範疇から逸脱してんだよこのB○Aア!) ……いえ奥様、言い方が悪うございしました。はつきり申し上げます、その格好は式に相応しくは無いのです。」

「アラ?それは貴方の意見じゃなくって?」

「(ぎっけんじゃねえ!!女学院の生徒並びに関係者の総意に決まってるだろうが!!なんだよ…意図的にそんなドレス選ぶのって…もしや…:…オマエその歳にして誰か引ッ掛けようとしてんのか?この年増パツキンが!!)」

…:…いえ、奥様、コレが日本の祝い事の形式です。”郷に入れば郷に従え”です。」

「むうー」

「(むくれんじやねえええ!!あ?もしかして、その膨らませた頬フルスイングでぶん殴って良いか?)…:…むくれてもダメですよ。奥様時間が時間です。そろそろおふざけはそれぐらいにして、ちゃんとスーツを来てください」ニイコツ!

「ワカリマシター コレに着替えれば良いんでしょ? まったく…:…コレだから日本人はカタイ思考しかできないンデース」ハア…

溜息ついてえのはコツチだぞゴアラア!!という騒めく心の声を押し殺しながら、何とかスーツを着せる所までもってこれた…:…

ふう…:…まさか昔、従姉妹から教えてもらった必殺技(作り笑顔)まで使うことになろうとは思ってもよらなかったぜ。

うっし!

後はさっさとこの、問題児を学校に送り届け…:…

「サトー!送迎は”ヘリコプター”で行くわよ!!」

oh…:…俺の戦いはまだ終わっていないなかったようだ…:…

その後、俺は奥様に、ヘリコプターの運用とその活用の仕方並びにメリットデメリットを十分に説明し、

「ヘリは、公用車みたいにそうポンポン使えるシロモノじゃねえんだよ!!それに学校にはヘリポートねえ!!ちったあ考えろこのボンクラアア!!(意識)」

という旨を丁寧に分かりやすく伝えた所。

またまたむくれ面になりながらも、奥様は公用車の方に乗ってくれた。

「奥様のスーツ姿とても良く似合っております。きっとお嬢様も喜んでくれますよ」と車内で励ますと、若干だが、そのむくれ顔が治まってきた気がする。

こうして、午前の最期の業務、奥様送迎という任務を果たした後、俺は、ホテル・オハラのおじんまりとした給湯室に立ち寄った。

そこで、少量の昼食をとる。

そして、仕上げにアルミで出来たコップに昨晚届いたコーヒー豆から抽出した新鮮なコーヒーを注ぎほっと一息着く。

何とかなつたぜえい……

お嬢様の本心としては、親が来て欲しく無いという気持ちがあるんだろうが、今回の場合は折曲折あったが理事長代理という事での出席だ。

俺はやれるところまではやった。後は、奥様が学校内でやらかさないうことを願いながら、ココで時間を潰そう。

そう思っていた瞬間、

ジリリリリリリリリンツ!!

給湯室にある古びた黒電話が、けたましく鳴り響く。

掛けてきた者の正体は、大体わかっているものの、どうにも出るのが億劫に感じる。

でも、出ないと後々めんどくせえーしな……
ガチャ……

「こちらはNTTド○モです。お客様がお掛けになった電話番号は、現在使われており……」

「サトオオオオオ！ふざけるんじゃないわよ！あんた一体どういうつもり？何でママが学校に居るのよ!!」

「……やはりお嬢様……ええーとですね、アレは貴方の母君ではありません！浦の星女学院理事長代理です！」

「Shiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiit!! ちよつと待つて!!じゃあ？パパはッ？パパはどうしたの？理事長ならパパがくるはずよ!!」

「旦那様は、奥様の杜撰な裏工作により今朝イタリアに飛ばされました。ですから、奥様はその代理です。」

「oh my god ツツ!!普通そこまでする!?そんなに私って頼りない!?!」

「いえ、そんな事はないと思いますが……まあ奥様には奥様なりの考えがあるんだと……」

「ママのバカああああ!!!……ツ!! ねえ？サトオウ??」

お嬢様の声色が急に可愛らしいあざとらしい
ものになる。

あ……この声は良からぬことを考えている声だ。どうにかせねば……

「へい…何でしょうか大将?」

「理事長が不在なら、代理は誰でも良いわよね?」

「はい。しかし、その場合血縁者が優先されますよ。もう諦めてください。」ズズズ

「なら、私が理事長代理になるわ!!」

ゴフツ!!

啜っていたコーヒ―が弧を描き俺の口から吹き出される。

「ゲホツゲホツ……お嬢様?今何と言いました?」

「だから私が理事長代理をやるーのー!!」

まるで、駄々っ子のように、普通じゃ考えられないワガママを言うお嬢様……

やっぱり、母娘揃ってボンクラなのは変わらないらしい。

「何バカなこと言ってるんだ!? お前な、そりゃ論理が破綻してんぞ!! 理事長つてのは、学校を経営する責任者! 未成年のお前に務まるはずねえだろうが!!」

「あー 素に戻ったー」

「あのなあ………いいか? 奥様は今回、理事長代理として学校居る。だったら尚更のこと下手な動きはできないはずだ。だから、一緒に奥様を信じて見ような! な! なツ!!」

「やだもーん! パパには私から連絡しておくからくく あっそうだ! 今日のお迎えは車?」

「あゝ!?! テメー今の状況でよくそんなセリフを吐け: 『パパにはサトウの給料の天引きも言っておいたほうがいいカシラー?』……度重なる無礼誠に申し訳ありません。今日のお迎えは、わたくしの私用車の方でお迎えにあがります。」

「oh! That's cool! 楽しみにしてるからねー!!」ブ
チツ

はあ……

結局あの2人の暴走は止められずじまいか……

旦那様、申し訳ありません。俺の力ではどうすることもできませんでした。

そんな思いを俺は、遙か遠くのイタリアの地に居る我が主人に懺悔

した……

その後、数時間が経ち時刻は午後13時を回った頃か、

俺は、丸目が可愛い我が愛車（HONDA super cub 110）でお嬢様を迎えに行った。

トコトコと愛嬌のあるエンジン音を響かせながら、内浦の海岸沿いを走っていると

心なしか、午前中の出来事もどうでもよくなるような爽快感に包まれる。

まあ、そんな俺の心境の変化なんてどーでもいい。

突如として走行中にスーツの胸ポケットがブルブルと震える。その正体は、俺の外での唯一の連絡手段であるガラケー（小原家支給品）であった。

片手で胸ポケットからガラケーを取り出し、発信先を見ると、「奥様」の二文字……

はあ……もう勘弁してくれよ。

ピッ

「もしかして？奥様。ご用件があるのであれば、簡潔にまとめお話しください。それ以外は受け付けませんよ。」

「サトオオオオオ!! ちよつと!」緊急会議 って一体ナンナンデスカー!!そんな事、ひとつつもきいてないわよ!!」

「奥様の自業自得じゃないですか。全く……そんな会議、私は存じ挙げませんよ。（すつとぼけ） それでは、私はお嬢様の迎えがあるので……」

「ちよつ…サ、サッ」ブチッ

ふう……

まあ、何はともあれ奥様が会議に呼ばれたと言うことは、旦那様はお嬢様の要求を呑まなかったのだろう。

よかった……これで生徒が理事長をするというとんでも事態は避けられた。

少しホツとすると共に、我を通して理事長代理という役職を買って出た奥様にも若干不安はあるが……

だが、決定事項は決定事項。

今は、理事長代理である奥様が踏ん張るしかないわけだ。

今日行われる緊急会議……

またの名を、「浦の星女学院統廃合計画」と呼ばれる大事を……ね？

小原家の使用人とお嬢様のお願い！

最近…お嬢様の様子がおかしい。

俺がそう感じたのは、あの波乱の入学式を経て、4月中頃に差し掛かった頃であった。

この頃、奥様は学校の業務（浦の星女学院統廃合計画）に、出突つ張りで俺も忙しい毎日を過ごしていた。

そんな中……

「ネーネーサトウ！ コレあげるう！」ヒョイ！

「はい？……ペロペロキャンディーなんか差し出して一体どう言った事でしょうか？」

「何でもアリマセーン！ 日頃の感謝を込めてマリーからのpressentよ！」

「……律儀すねえ……」

……このように、最近、俺になにかと優しく(?)してくれるのだ。しかし悲しいかなこんなペロキャン1個如きでは俺の心は1ミリたりとも動かない。

しかし、こう言ったこと以外にも、俺の姿を見ると何かと声をかけ肩叩き券やら家事のお手伝い券やらを渡してくる。

はたからみりや、微笑ましい光景かもしれないが当事者の俺からしてみれば逆に、

「何故に？」といった疑念が生まれる。

そういつた事が続き迎えた今日という日。

疑念が「何か企んでいる」といった確信に変わる、ある事件が起きたのだ。

それは……

「ネエーママ！ コレあげるわ！」

「oh！マリー……コレは……」

「手作りのお菓子！ママの為に作ったの！」

「マリイ……グスツ……貴方って娘はもうっ！アイツラアアアブウ
ユウウウウ!!」ダキツ!!

「……ママ……マリイもママの事大好きー！」ニイタアア

とりあえず、奥様のチョロき加減は放っておいて、

……ありえねえ……あのじゃじゃ馬が親、しかも奥様にプレゼントだ
とお!?

絶対何かある。

ここまで人に媚びを売るのは、何かきつと裏がある……

そういつた事を考えながら気づけば、無事に本日の業務を全て終え
ていた。

……何かやらかされる前にお嬢様の企みを阻止しなくては……

心労は絶えないが、小原家の使用人としてやらねばならぬ業務がま
た一つ増えてしまった。

……何故だろう。なんか胃が痛くなってきた。もういいや、寝よ
う。

そして、俺はもう住み慣れた硬く狭い給湯室に入り、敷いてある布
団思い切りダイブすると深い眠りに落ちていった。

……サトウが寝静まり、数分後。

怪しい影が給湯室付近に現れる。その影はサトウが寝た事を確認
すると、ガサゴソと、給湯室を物色する。

そして、あらかた作業が終わったのか、その影はニヤリと笑い、
グウーグウーと寝ているサトウにこう囁いた。

「へーい。サトウ……これで、アナタにはこちら側についてもらい
マース……」ムフフω

次の日の朝。

「ムニャ……うっうーん もう朝かあ」セノビ

規則正しい生活を厳守している俺は、己の体内時計が作動し朝5時にしやんと起床する。

あたりはまだ少し薄暗いこの時間、30分後から早速本日の業務が始まる為、俺はその準備に追われていた。

「よっしやあ!! 今日も1日ががんばルビイツ!!……と、くだんねえ事やってねえで着替えつか……ん?」

黒澤家次女の名前を当てた叫びで、気合いを入れつつ、スーツに着替えようと給湯室の衣服箆筒に手をかけた時、何かの違和感を感じた。

……あれ? なんかこの箆筒、すげえ引きづらいんだけど……なんか詰まるようなもんでも入れたっけ??

ガシガシと、箆筒の引き手を動かすが一向に開く気配がない。

「クソ……朝1発目からついてねえーぜ。こうなりや力ずくだツ! せええええのおおお!!」ガコオンツツ!!

全体重をかけ思い切り箆筒を引っこ抜く。すると、箆筒の中箱ごと外れたような音が給湯室に響き、勢い余って俺は後ろにつんのめる。

ゴテンツ!

「痛えっ……ったくなにが詰まってやが……なツ?!?」

俺は筆筒の中身を見て絶句し固まった。

何故なら、その中には俺のスーツ以外に”男”の俺には”必要ないもの”がぎっしりと詰まっていたからだ。

そしてそのものとは……

「な、なんで、”ブラジャー”や”女物のパンツ”が俺の筆筒の中に……」

当然の事だがひとつ言っておく。

俺は下着泥棒じゃない。そんな事は断じてしない。

つまり、ある一部の人間からしてみれば天国のようかもしれないこの状況。

……生憎俺には非人道的行いにしか見えないが……こんな事したのは俺以外の誰かと言うことになる。

というか絶対そうだ!!

しかし、これらは完全なる物的証拠……裁判にかけられたら俺の真実の言葉も単なる虚言に過ぎず、1発で有罪判決確定だろう。

なら、今やるべき事はただ一つ。

この給湯室中に散乱してしまった下着を可及的速やかにかつ誰にも気づかれないよう元あった場所に返却しなければならぬ。

……犯人を取っ捕まえ、ぶっ殺すのはその後だ。

そうとなれば、早速行動だ。

飛び散った下着を片っ端からかき集め、1箇所にとめ始める。

マジで、速く片付けないと……人に見られたら終わりだ……小原家で仕事出来なくなる……いや、それよりも社会的に殺されるツツ!!

瞬間

パシヤッ!

焦りに焦り片付ける俺は再び固まる。

シャッター音……だと……???
ギ……ギ……ギ……

油が切れた機械人形の如く、後ろを振り返るとそこには、精巧な一眼レフを構え氷のように凍てついた表情を浮かべる、お嬢様の姿があった……

「うわあ……アンタそんな趣味してたの………気持ち悪い……」
人のものとは思えないほど凍ったお嬢様の声が、俺の耳に響く。
いつもは英語訛りの入った日本語を言うお嬢様が、流暢な日本語で喋るあたり発言のガチ度が伺える。

「お、お嬢様!?! ち、ちがががツツ 違うん……んぐツです!! こ、これは!!」

「………何?」パシヤツ!

「お、俺じゃ無いです!だ、誰かの陰謀だ!俺を陥れようとしやがった性根の腐ったクソ野郎が……」

「へー……言い逃れするんだ。こんな決定的な証拠があるのに。」パシヤツ!

片手の一眼レフで、固まる俺を容赦なく取り続けるお嬢様。
必死の弁明はむしろ逆効果のようで、どんどんあたりの空気が冷え切っていくのがわかる。

……お嬢様の凍てつく眼差しと抑揚のない軽蔑する声に、俺の精神は次第に限界を迎えていった。

「お、お嬢様! 本当に本当なんです!!俺は……」

「はあ……もういいわよ。」

「へ？」

「アンタが気持ち悪い社会不適合者なのはよく分かったから、だから、もうこれ以上近づくな。fuck off pig face
消え失せろこの豚面野郎
!!」

「ああああああああああああああああああああああ!!」

流暢な日本語から突然英語での罵倒。

しかもそれを、侮蔑の念がたあつぷりこもっているお嬢様のソプラノボイスで言われ、極め付けに中指まで立てたれの3連コンボの炸裂だ。

当然の如く俺は発狂し、目の前が真っ暗になる。

……こうして俺の小原家の使用人としての人生、いや、俺の今後の人生は終わったのであった……

―― 鞠莉視点 ―

ムフフ………全ては計画通り!

まさか、ここまで上手くいくとは自分でも思っていなかったデース!

それにしても、

給湯室に散乱したブラジャーやパンツ(全てママの私物)にまみれ、絶望し目が虚ろになっている顔をしているサトウを見ると

何かこう加虐的な興奮が……

んんっ! (咳払い)

そんな事はどーでもいいーの!

これでもうサトウは私には逆らえませ〜ん。

え?なんでこんなことをしたのかって?

それはデスねー！

私が”やりたい事をする為”に、サトウの協力を得るためなの。もちろん、最初からこんな強引すぎる方法で協力してもらおうとは思ってなかった。

……でも、この鈍感使用人!!

私がどれだけキュートでベリーグッド！なプレゼント（注：例の肩叩き券やペロキャンなどの事）あげても、全部仏頂面で受け取るんだもん!!

それに、プレゼントの回数を増やす度に私のことを疑わしい目で見てくるし……

!!
お願いしようにも、そんな態度じゃ頼みようにも頼めないじゃない

（※お嬢様は、何か企んでいるということを見透かされているのが分かってません！しかし、本人は至って真剣にこう考えています。みんな！温かい目で見守ってあげよう！by小原家の使用人S）

と、言うことで、ちよつとばかりの意地悪な今回の計画を実行したわけ！

うーん、でも、ちよつとやり過ぎちやつたかな……流石にブタ面野郎は酷かったわね……ごめん。

さて、そろそろ本題を切り出すわよ

「ねえ？サトウ、コレ。ばら撒かれたくはないでしょう？なら、私のお願い1つ聞いてくれるかしら？そしたらこの件はなかった事にしてあげる！」ムフッ

「……お嬢様……わかりました。しかし、その前に1つ私もしなければならぬことがあります。」スツ

あ、あれ!?なんかおかしいな……

さつきまで目が死んでたのに、今じゃなんかそれを通り越して目がすわってる……

ま、まあ気のせいよね！

そんな風に私が思っている間に、サトウは立ち上がると給湯室のキッチンに向かい、あるものを取ってきた

……それは……怪しく光る銀色の物すなわち……包丁ッ!?

「お嬢様、長い間お世話になりました。このサトウ、やっていないことで辱めを受け生きるよりも、この場でスッパリと死んだの方が世のため人のためです。では……」ギランッ!

「ちよ!?ま、待って!!早まるのは早いわサトオオオ!!!」

サトウの私の予想の斜めをいく行動に、思わず止めに入る。素早く、彼の両手を抑え下手なことをしないようにグウウツと強く抱きしめる。

やはり、やり過ぎてしまった……

うう……悔しいけどネタばらししなきゃ……

「さ、サトウ、ごめんなさい。流石にやり過ぎたわ……まさかあなたをこんなにも思い詰めるまで追い込んでしまうとは思わなかったの……ちよつとした悪戯心だったの」ウルウル

明確に何をやり過ぎたのか言わずに、目元を潤ませる。コレは昔ママに教わった、やらかした事を帳消しにできる女の子の必殺技をらしい……

そんでもって、肝心のサトウの方を見ると……

「お、お嬢様……」カンッ! カラララン

すげえ……目に生気が戻った。

それに危なっかしい包丁も彼の手からするりと抜け床に落ちる。

よし!このままゴリ押ししよう!!

「うう……あのね、サトウにお願い聞いてもらいたくて……グスツ……

それで……こんな事しちゃったの……ごめん。」

「そう……でしたか……お嬢様。」アタマ ナデナデ

しゃあ!!もうコレで完全に堕ちたわね!

少し思ってた感じとは違ったけど、結果的にサトウをこちらに引き込むことができたわ!

さあて、あともうひと押し!!

「それでね……あの……」てことは、このブラやらパンツやら仕込んだのはお嬢様だと……やつと自白したなあ?」……へ?」ガシツ

突然の口調の変わりように私は動揺した。

何故なら先程までは従順な犬の顔をしていたサトウが、今は獲物を捕らえたハイエナのような表情を浮かべていたからだ。

さらに、さつきまで私の頭を撫でていたサトウ手が、いつのまにか無い。それどころか、その手は私の腰あたりをがっしりと抱え込み、私の後ろにサトウが回り込む。

げ……この体勢はまさか……

「朝っぱらから人様に迷惑かけやがって!!」グググツ!!

「な、アンタ謀ったわねえええええサトウ!!」

私は足をばたつかせながら抵抗するが、体は段々と上に持ち上がっていく。

ダメだ……もう終わった……

「ハハハ!!生まれの不幸とその足りねえ頭を呪うがいい……くたばれええええええ!!」ハイメンブリツジ!!

体が後ろに倒れていくのを感じながら私は、思い出していた。

ああ、そういえば私、昔つからサトウに悪戯仕掛けては返り討ちに

あうのが関の山だったわね……

ま、まあ 今回も私の負けにしといてあげるわサトウ。だけどコレだけは言わせなさい!!

「覚えてなさい!!いつか必ずギャフンって言わせてやるんだからね!!
サトウ……ゲゴフウツ!!」

こうして、この「小原家の使用人下着ドロ騒動」は、鞠莉が最後の最後に墓穴を掘り、その鉄槌としてサトウのジャーマンスープレックスが炸裂したことで幕を閉じた。

……なお、鞠莉が落下した場所は、サトウがあらかじめまとめて置いてあったブラとパンツであった為、大事には至らなかったらしい。

数分後

「ムグウー」

「ほお……人を陥れておいて、そのムクれ面出来るってことはまだ反省してねえようだな」ポキポキ

「なっ！違うわよ!!……というかそもそも！私のお願いを聞こうとしないアナタが悪いのよ!!」

「あ？自分に都合が悪くなると思うと言いだす。これだから上流階級のお嬢様は……」

「アンタ……こつちにはまだ撮った写真があるんだからね……」

「それならば、こちらにも考えはある。先程の自白はこのボイスレ

「コーダーに保存させてもらった。」スツ

「い、いつの間に……」

「テメエの言質撮るためにいつも常備してるんだよ。」

俺は、ポケットから小型のボイレコを取り出し目の前でプラプラと見せびらかす。

……実際のところ、常備してたのは事実だが、コイツを押す暇なん
でなかった。

まあしかし、一応あつちが脅してくるならこちらも脅して返しておかないと、あの写真をバラまかれちまう。そいつだけはどうにかしたため、苦し紛れのハツタリだったが……

意外といけたな。

さて……今回の騒動の目的、つまりこのバカが何故こんな事をしたのか？話の焦点は必然的にそうなる。

確か、お願いとか言ってたな……

「ハア……さてお嬢様。今回のことはお嬢様が奥様にこの下着一式を返却する事を条件に水に流してあげますから、いい加減そのお願いとやらを教えてください。」

「…フーン！」ソツポムキ

「(このガキ……)教えて下さらなければ、聞けるものも聞けませんよ。お嬢様……」

「やーだー！」

「じゃあ、もう聞かねえからな!!」

「……ポトリ……うぐ……サトウがいじめたあ……」

「……目薬入れたの見えましたよ、お嬢様。さあ、もうそろそろ学校の支度もしなくちゃ行けないんですから！早くお教えください!!」

「ちえーつまんないのー。わかったわよ。いえばいいんでしょ！言え
ば！」

最初からそうしろよ……茶番がクソ長すぎるんだよ……

そんな風に、思ったのもつかの間。お嬢様はそのまま続けこう言っ

た。

「私、スクウーアイドルになりたいの！だからお願い！サトウ!!
ちよつと力を貸して!!」

……まさか……な……

お嬢様の口からスクールアイドル……という言葉が聞くとは思っ
てもなかった。

……みんなには悪いが、次回までにこの言葉を溜めてく必要では無
いと思うので、先に言っておく。

それほどまでに、このスクールアイドルって言葉は俺に因縁深いも
のである。

悪いなお嬢様、俺は、スクールアイドル……いや、アイドルというそ
のものが嫌いなんだ。この世の中の何よりも……

小原家の使用人と大怪獣ハグウ!!

遠い記憶……

ー 東京都 秋葉原 某マンション ー

『ねえねえー！こっち見なさいよ！』セナカパアアツン!!

『ぎゃああああ!!……な、なんだお前か……飯作ってる時に後ろから急に声をかけるな！今油もん作ってんだ！ワンチャン俺死ぬぞ!!』

『うつぐ……ぐ、ごめん。』

『で、なんだよ？なんか用があんだろ……』

『ふつつつ、ついに、この私が発明した必殺技がものになってきたのよ！さあ見てなさい!!』

『ほお……貴様が何思いついたんだからしらねえがやってみろよ。』

『行くわよツ!!』

『お、おう。……あ、味噌汁の味見しとかねえと……』ズズズ

『にっこにっこにー♪ あなたのハートににっこにっこにー♪笑顔届ける矢澤ににっこにー♪にっこにー♪って覚えてラブにこっ♪』

『うつ!?ガフツ!ゲホツゲホツ!! は、肺に味噌があ……ぐ、苦しい』
ゴホゴホツ!!ボタンツ!!

『どう?これで私のファンになっちゃったでしょ!……ん?……あ、アレ? 従兄さんツ!?ちよつと起きて! 起き……ちよ……』

ちよ……サ……ウ……

ちよつ……サト……

ぬぬ、起きな……

鞠莉……アレ持つ……て

ちよ……それは不味いデース……

行くよ……せーええの!!

バチイイイイインンツツ!!

………んごお
!?!?!?!?!

「………さて、まずは状況説明からしていただくか、なあ………お嬢様、松浦あ?」

ここは、ホテル・オハラ在给湯室。そこで俺は、先程ぶつ叩かれてヒリヒリと痛む尻を優しく撫でながら、目の前で正座するバカガキ2人を見下ろす。

「………だつてえーサトウが起きないんだもん!!」

「なるほど、なら、午前の仕事を終え午後業務に備え睡眠をとつていた人間に暴行を加えてもよろしいと?」

それに起こすなら、揺するなり、肩を軽く叩くなり、他にも方法があつたはずですよ。

それと……これはなんだ?」

ゴロツ……

2人の前に俺は手に持っていたブツを転がす。そのブツとは、見るからに固そうな乗馬用の鞭が転がっていた。

普段は、お嬢様が乗馬の際に使用しているのだが……

「お嬢様、……まさかねえ……これでぶつ叩いたわけじゃありませんよねえ……俺人間だよ?」

「いや、だつて……」……正直に言わないとまた、ジャーマンスープレックスの刑ですよ」か、果南!!」ナミダメハグウウウ

ほう……こりやいけませんなあ。上流階級のご令嬢が自分の責任を他人に押し付けるなんて……

ん?ちつと待てよ……そういえば、記憶がうる覚えだけど、お嬢様の「ちよ……それは不味いデース……」と言った声が聞こえたような気もせんでもない。

ということとは、主犯は……

「やりやがったのはテメエか!松浦アア!!」

「フツ 揺すつたて、肩叩いたつて起きない自分が悪いんじゃない?」

「じゃあテメエは、人起こすのに馬用の鞭でぶつ叩くのか?」

「別にい、アンタ馬とかとほとんど変わらないじゃん。」

「なんだとお?」

「あ、馬……いや家畜には人間の言葉わかんないか……あ!家畜だからこんなくつそ狭い給湯室なんかに住んでるんでしょ? (煽り)」

「……」

「あ、黙ったあ やっぱし凶星だったんだ!だったら叩かれたつてしょうがないよねえ (煽り)」

「……」 ポキッポキッ

「ちよ!? さ、サトウ!? か、果南ももうやめようよ!ね?ね!ね!!」アタフタ

「おや、お嬢様……この不毛な戦いを止めようとしてくださっているのですか。」

うむ。ならこの売りつけられた喧嘩、誠に遺憾ですが買うわけには……」

「やーいやーい、家☆畜！家☆畜！馬面ア！牛面ア！豚面ア！ズラアアアア!!（煽りかつ若干の花丸成分配合）」

「……いくな。オイゴラア!!松浦アア!!おじさんひさしぶりにキレちまったよ……表出るオツ!!」ブチイツツ!!

「もう、アラサー突入間近の家畜さんには負けませんよおくだ。「黙れよ腫れ乳ゴリラ」……殺す!!」

「お、お願い2人とも!!喧嘩しないで!!」

ちよ、サトウ貴方もう大人でしょ!みつともないわ!それに果南ももう気が済んだでしょ!!

だから2人ともやめy…

ゴスツ

「うげええええ」

あ、果南のボディブローが入った……」

……こうして、第89次松浦vs使用人抗争は、果南渾身のボディブローが無事使用人の腹筋をぶち抜いたため、果南の勝利に終わった。

ちなみに今までの勝敗率は果南9、サトウ1の比率である。

ぐうう松浦の野郎、まさかフルスイングであんな良いパンチ打ってくるなんて……

ん?あ、皆さま。ご無沙汰しております。小原家の使用人、サトウと申します。

先程は大変お見苦しいところを……

え?んな茶番いいから早く本編始めろ?

これはこれは大変失礼。

それでは、話を進めましょうか!!

前回、お嬢様が俺に出してきた「スクウーアイドゥになるため力を貸して欲しい。」というお願い。

個人的に色々思ったところはあるものの、可愛いお嬢様のため、この不肖使用人、できる限りの協力をすることをきめたのです。

……決して、ばら撒かれるとヤバアイ写真がまだお嬢様の手元にあつて、弱みを握られているから……というわけでは無い。

さて、ここで俺は1つの疑問が浮かんだ。

スクールアイドルになりたい。という事に対し、俺は一体どういった協力をおこなえば良いのだろうか？

ぶつちやけ俺は、人前で歌ったことも踊ったこともない。そんな人間がアイドルに果たして協力できることなんてあるのだろうか？

そんな疑問に対し、お嬢様は清々しく、こうはつきりと言いつつ切った。

「ママに知られないようにしたいの！だから、ママにバレないように活動を行うためにも、サトウの協力が必要なの！」

あー……なるほど、そっちの七面倒な方か……

てことは、俺は、あのモンスターマザーの目を掻い潜り、お嬢様の活動を支援する。それに関して奥様から言及されてもしらを切り続けなきゃいけない。

……ますます、母娘の間に溝が生まれる……しかも今回は、俺もそれに加担するわけだ。

……うわあエグついなあ……胃薬準備しとかねえと今度こそ胃潰瘍起こしそうだ。

まあ……なんやかんやで、結局お嬢様の願いを聞く事にした俺は、4月中旬頃からこのGW明け間近をお嬢様のスクールアイドル活動を支援していた。

そして、今日。

GW最終日、俺にとっては「GW？ああ”頑張ってお仕事乗り切る

う週間”の事？」であるこの忌々しい期間が終わる、もう一踏ん張りの最終日。

突如、このホテル・オハラに大怪獣ハグウが乗り込んできたのであった……

さて…時間を冒頭に戻そう。

俺は我が城（給湯室）にて、気持ちよおく昔のことを夢に見ながら昼寝をしていた。

が、あのクソ腫れも……ごめんなさい。だから手に持っている鞭をこちらに向けてくださいませええ松浦様!!

げふっん

えー、職務怠慢をしていた私めに松浦様の愛の鞭（物理）が尻に炸裂し、その後、腹部に強烈な愛の拳（物理）を受けた俺は、強制的に覚醒させられた。

で、

「あのー俺、起こして何すんですか？SM嬢ごっこするなら他所でやって欲しいんですが……」

「ちーがーうー！今日うちにママいないでしょ！だから、果南と一緒に来週発表する曲や衣装の仕上げをしようと思って、うちに呼んだの!!
それで、衣装の採寸とかサトウに見てもらおうと思って!」

「成る程ねえ…そういうことでしたか。後、松浦、いい加減その鞭下ろしてくんない？それ一応人殺せるからね?」

「は?採寸の時、変なところ触られないようにするための自衛手段ですけどおー」

「……その自分の身を守る意識は誠に良い事だが、過剰防衛って言葉知ってるか?」

うーん。まずは俺は、松浦との溝を埋めんといけないのか……
でもこれに関しちや、俺にだって言い分がある。だって……

「なあ松浦、お前がもうどれだけ、『ココのうちの子になるうう』って
だだこねだからつてもう尻を叩いたりしねえから。」

「なっ!? / / / /」

そう、これが俺と松浦の間にある消えない溝。俗に言う、第1次松
浦vs使用人抗争の事である。

あの時、「お家でお父さんとお母さんが待つてるよー」と必死に説得
するも、微動だにしない松浦に対し、流石に帰らせなきやいけない
め、

俺は、松浦を抱え少し軽くぺしつと尻を叩いたのだが……それが
いけなかった。

「ほら、お父さんとお母さんが迎えにきてくれてるんだ。もう心配か
けんなよ……」アタマポンポン

「う、うう……ぴえええええええん」

「だ、ダニイ!？」

「あー、いーけないんだいけななんだ。あーららこらら、果南のパパに
言つちやおー!」トテトテ

「お、お嬢様!? それはダメ、あの親父さん本当にシヤレにならな……
「誰だッ!!うちの娘泣かせた奴はッ!!」ぎやあああああ!!!」

その後、小原家の使用人は、果南の父親にメツタメタにボコられ、荒
縄で簀巻きにされた上に内浦海岸に沈められそうになる……

という事件が発生したのだが、それはまた別のお話……

ああ、思い出しただけで、頭痛と腹痛が……

ま、まあこのような事があり、俺はその頃から松浦に逆恨み(?)されてるのだ。

ヒュンツ!

こら松浦ア! 恥ずかしいの隠すために俺に向けて鞭を振るうんじやねえ!!

まあ何はともあれ、俺は若干のトラウマがフラッシュバックしながらも、とりあえず頼まれた衣装の採寸の方を進めていった。

「ん……?」

「どうしたの? サトウ?」

「いや…… 改めてですけど、お嬢様達、かなりスペック高いですね。」

「……??」

おおっと、2人とも分かっちゃねえのか?

俺がやっている衣装の採寸……という最期の微妙なサイズ合わせなんだが

今、合わせているこの衣装、松浦、黒澤、お嬢様の3人で0から作ったのである。

素人にしちやかなり……いや素晴らしい出来の衣装だ。2人はキョトンとしているが、こんなんできる人間そうそういねえぞ。

あ、そういや……

「お嬢様、今日黒澤の奴はどうしたんです?」

「あー、それがデスネー。今日は琴のお稽古があるとかで1日空いてないんだってー。」

「そりや大変だな……いつもイタズラばかりしているお嬢様とは大違……「サトウ?」……いえ何でもありません。」

やべえ…ついスルツと口が滑っちまった。今日は、寝ぼけてるから
かちよいちよい本音が出ちまう。気をつけねえと。

しかし、なるほど、今日黒澤の姿が見えなかったのはそう理由だったのか、俺としては松浦という暴力装置のブレーキとしていて欲しかったのだが…お稽古事ならしうがない。

そんな、たわいも無いやり取りをしながら、気づけ、採寸が終わり、
衣装の微調整も完了した。

「よし…こんなもんかな。というか、ほとんど衣装のサイズがあつて
るから、直すところもそんなに無かつたんだよなあ。」

「当然デース！これは3人で一生懸命に作つたんだから！」

「だったら、3人で合わせりや良かったんじゃ？わざわざ俺に、頼む必要も無かつたでしょ？」

「それはそうんだけどネー…じ・つ・は！本当の目的違うのお〜」
「はい？」

サツ!!

するとお嬢様は、素早く俺の手元にあつた衣装を搔つ攫つていった。

「あ!?! ちよ、ちよつと待て！いきなりなんだよ!?!」

「thank you! サトウ!! ねえねえ! さっきの答えが知りたかつたらリビングまで来てね!!」

そういうと、さつきから横で黙つたままの松浦の手を引いて、給湯室から出て行く。

…：…今度はなあに企んでやがるんだか…

そんな、不安とちよつとした期待を膨らませながら、俺はリビングへと向かつた…

数分後……

「で、来たは良いんだが……あいつらどこ行きやがった？」

リビングに着いた俺は、少し困惑していた。なんら変哲も無いいつものリビングに俺だけひとりぼっちの状態……唯一ちがう点といえば、部屋の中央に置いてあるソファに可愛らしい字で「使用人専用席！」と書かれた張り紙が貼られているぐらいだろうか

「……これに座れば良いのか？」

「そうデエース！さき、チャチャつとそこに座っちゃって!!」

ボソツと呟いた言葉に、どこからともなくお嬢様が返答する。しかし、部屋に響くのはその声だけ、姿は見えない。

……とりあえず、俺の中の警戒レベルをMAXまで引き上げ、最新の注意を払いながらソファに座る。

「座ったみたいですねー！ それじゃ行くわよ!!」

「お、おい。今から何をおっ始めるつもりなんだ？頼むから仕事だけは増やさ……」

そう言いかけたのと同時に、俺の目の前の扉が開き、先程の衣装を着たお嬢様と松浦が出てくる。

「ロックオン！えへへーどう？ サトウ？似合ってる？」

「なッ!?!／／／」

「あー。この人照れてるよ鞠莉。やっぱウブだー」

「なんだと松u……あらあサトウ？果南だつて可愛いよね！」……否定したいが、2人とも似合ってるよ……しかも犯罪的に……」

「やったー！」ハイタッチ！

予想外の出来事にたじろぐ俺。

てつきり、俺を毘にハメて嘲笑う準備でもしてんじやねえかとヒヤ

ヒヤしていたが、

……これはこれで、逆に心臓が悪い。

……なんで、こんなにも似合ってたよ。最初のロックオン！で、危うく俺の中にある何かイケナイ感情が撃ち抜かれそうになったぜ……

「よし、じゃあこの意気で、私たちが踊るところも見てもらおう！」「まさか、それが目的だったのか？」

「そうだよ。今度学校で踊るから、その前にまあ見られたってどうでもいいアンタに見てもらおうって訳！行くよ鞠莉！！」

「よしきたー！」

「この野郎……いちいち言葉に棘があるんだよなあ………にしても………」

……楽しそうだな。このコンビ……いや今は居ないが黒澤を含めたこのトリオか。

まるで、今ならなんでも出来る！そんな元気と希望を持っている面持ちだ。

まあ、それ自体は……間違っちゃいないがよ。

すると不意に、最初夢の中で見ていた昔の記憶が蘇る。

『さあ！見てなさいよ！今からここでスーパーアイドルが誕生するんだから！！』

『おうおう、その意気込みはええんだけどな。今、マンシヨンのお外は真っ暗だ。時間帯的にもう少し声のボリュームを考えてだな……』

『ふっ 私の必殺技食らって喉に味噌汁詰まらせた人は言うことが違うわねえ……何？そのくらい惚れ惚れしい姿だった？』

『な、なんだと!? この野郎ツ言わせておけば……大体なあ人が飯

作ってる時に…『やーいファンだつてことを認めなさいよー』…おい
こら”にこ”ッ!!人の話を聞けえええ!!』

…懐かしいな。

あの頃に、戻れたのなら俺は…

「サトウ!!なあくにブーツとしてるの!行くわよ!!」
「んっ?あ、ああ…」

…いいや、何を考えてる。もうあの頃にはどうやったて戻れな
い。

俺は、小原家の使用人、サトウだ。

だからこそ…もう俺には、あの家族の記憶は…
忘れるべき過去なんだ。

覚悟と責任 前編

「なあ、お前は将来何になりたい？」

あれは俺がまだ中坊の時だっただろうか。

将来という、ふわりとした疑問を考える余裕と時間がたっぷりであったあの頃、俺は親友にこう聞いた。

「ん、そうやなあ…僕はミュージシャンになりたい！」

「ミュージシャン？…って、テカテカにライトアップされたステージで歌ったり踊ったりするアレか？」

「せや！僕はあの舞台上で輝きたいんや。自分自身の力だけで！」

「なるほどなあ…」 望 のルックスとそのイケボがありや案外すんなりと行くかもな。」

「そんなおだてんといてって／＼／＼ そういう君は何になりたいん？」

「俺か？俺は……」

嗚呼、あの頃は。

いつ叶うかもわからない夢に希望を抱き、自分達は何でもできると思い込んでいた。

何の力も無く頭だつて良くはないのに…

てめえだけの力だけで世の中好きなように生きていけるそう信じていた。

俺もアイツも……

夢って奴は、目指す者に平等に勇気と希望を与えてくれるとよく言われる。

だが、世の中には成功者と呼ばれる人々は数少ない。当たり前だ。

現実はそのなにかいもんじやない。

今だから言える事だが、

人は成功者の美談や逆転劇ばかりに目が向いて、”夢という本質”から無意識に目を背ける傾向にあると思う。

夢は思うだけじゃ、目指しているだけじゃ決して叶わない。

目を背けたくなるような挫折や絶望の中で、足掻きに足掻き、惨めにのたうちまわりにまわった末、選ばれた者のみにしか得られない栄光なのだ。

そして、成功者以外の者は必ず、夢を諦めるか、夢という果てしなく続く地獄を歩むかの岐路に立たされる事になる。

52

「サトウ…マリーの様子はどうデスか？」

「案の定、夜になっても部屋から一步も出てきませんね。」

その選択を迫られた時、無力さや理不尽さに

耐えられない人は少くない。中には心を壊されてしまう人だけっている。

「そう……来週には日本から飛ばなければならぬのに、このままの調子じゃBad!体調を崩して留学どころじゃなくなってしまうマース!!」

そしてお嬢様は今、岐路に立たされている。

「やはり、スクールアイドルなんてやらせるべきではアリマセンでした!!足まで怪我をして、あの子の為には何一つ良いは……」

「奥様!」

おおっと、柄にも無く大声上げちまった。考え事をしていたからだろうか？

「ど、どうしたのですかサトウ?いきなり荒げた声を出して……」

「こんな事で狼狽えるなんて奥様らしくもない。いつも通りドツシリと構えていてください。」

「こんな事って…サトウはマリーの事が心配じゃないんですか?」

「心配ですよ。しかし感情が先走ってしまっっては良い判断はできません。この一件、私に任せてくれませんか?ちゃんと説得してきますよ。」

「……OKアナタに任せたわ。」

そういうと、奥様は寝室へと向かい部屋の扉を閉めた。

歩く足がちよいとヨタついていたのは、ここ3日間寝つけていないからかもしれない。

奥様。今日はゆっくりとおやすみなさい。

静まり返った夜のホテルオハラで、誰も居ない部屋の中で俺はそう呟くのであった。

まどろっこしいのは嫌いだ。

結論から言おう。

お嬢様が丸3日寝室から籠って出てこない。

こうなった事の次第は、スクールアイドルの活動中、お嬢様が怪我をしたことから始まった。

足部靭帯損傷 重症度Ⅱ。

平たく言うならば足の捻挫だが、無理をすれば確実に後遺症が残ると言う診断を受けた。

3ヶ月間絶対安静とドクターストップをうけ、そのことを耳にした奥様が、毎度の如くお嬢様を叱りつけ、スクールアイドルの活動を禁止するよう命じた。

この時、お嬢様が素直に奥様の言うことを聞いていれば……ここまで問題は大きくはならなかっただろう。

あろう事か、1週間後に大会があるからという理由で、黒澤と松浦と共に東京のスクールアイドルイベントに強行参加。

とても踊れるような状態ではないのに、足を引きずりながら、東京まで出かけたという事実はその日のうちに奥様と旦那様の耳に入った。

どうにか松浦の機転で、棄権という形を取り事なきを得たものの、奥様に加え普段はキレない旦那様もカンカン。

ヒートアップした親子喧嘩は、「浦の星を出て海外に留学し、もう一度自分を見つめ直す様に」という結論に至った。

で、

今日合わせて丸3日。お嬢様は寝室に籠り、一切出てこなくなってしまうのである。

嗚呼、思い出すだけで頭が痛くなってきた。

さつきの様子を見てわかる通り奥様自身、もう限界が来ている。それに旦那様は、また都合悪く海外出張で国外に飛ばされるし…小原家は今、家族崩壊の危機を迎えていた。

いつも通り時間が解決するだろうとタカを括っていたが、このままじゃマズい。

突発的に襲ってくる頭痛を堪えながら、俺はカツ…カツ…とホテルの廊下を進み続ける。

馬鹿でかいキッチンや数多のドレスなどがある衣装部屋、そして、俺の牙城給湯室を抜けた先にある大きな部屋。

ここにそ我が主、小原鞠莉の寝室だ。

コンコンツッ!

ノックをするも返事は返ってこない。当たり前だ。

へそを180°ひん曲げたお嬢様は、ちよつとやそつとの事じゃこのドアを開いてはくれない。

過去に逆ギレした時なんざ、ドア周辺にトラップ仕込んだり、隙を見ては、部屋から抜け出してお菓子という名の兵站確保するなど中々の知将ぶりを見せてくれた。

あー懐かしい。

まあ今回の場合は、そのくらい気力があるかどうかすら怪しいが。ギリギリ…パキン!

お嬢様の手によって鍵穴が接着剤で塞がれているのを確認した俺は、持ち前のピッキング術を用いて、鍵穴を破壊する。

「お嬢様、入りますよー。」

ギィィ…

俺の背丈の1.5倍はあるドアをゆっくりと開く。お！今回はトランプ無しか：一先ず安心。

ホッと一息つく中、前方を見ると、そこにはベットにうずくまるお嬢様が居た。

「……………入るなって言ったじゃん。」

開幕早々、冷たい声で俺を拒絶する。

それにめっちゃ睨んできて普通に怖い。

だが、こんな事で怯む程伊達に使用人はやってない。

「いや、ノックした時に返事がありませんでしたので、ワンチャン死んでいたら困るなーと思って。」

「フンっ！どうせアナタもママやパパと同じで、小言を言いに来たんでしょ!!」

「決めつけられるのは心外ですな。」

「どうやら、俺のお嬢様からの信用度は0。もしくは—からのスタートラしい。俺の存在も地に落ちたもんだぜ。」

「どーだか、私がママやパパに怒られてた時。何もしてくれなかったくせに……………早く出てって!!」

「逆恨みも甚だしいっすねえ…。まあ、とりあえず、ご飯くらい食べて頂けませんか？お体を悪くなっさってしまいますよ。」

「Shut up! サトウは今の私の気持ちかわからないの!」

「お生憎様、私はエスパーではないので把握しかねます。」

「フン！そんなんだから、女の子にモテないのよ!!」

Get out here Cherry Boy!!」

キレッキレの罵倒が俺の心を抉っていく。

ひどくないっすか皆さん？

お嬢様の身を案じてこうしてやってきたのに、慰めるどころか、信用は失うわ恨まれるわ挙げ句の果てには全国の貞操を守っている方々を敵に回す発言までなされる始末。

まあ、だいたい察するに、今回の一件で奥様や俺に対する日頃の鬱憤が爆発したんだろう。

別にその吐口に俺を使うのは構わないが、それでは根本的な解決にはならない。

それにはまず、彼女の湯だった頭を冷やしていただかないとダメだ。

「まあまあ、とりあえず”このチエリーティー”でも飲んで落ち着きましよう。あ、コレおろしたての茶葉なんで、お嬢様と同じく”^処手付かず”ですよ。」

「なっ!?この無礼者!!」ブチッ!

(わざと) お嬢様の神経を逆撫でする様な皮肉たっぷりと込めた紅茶を振る舞う。

予想通り、堪忍袋の緒がブチ切れた彼女はティーカップを掴むと思いつき切りこちらに投げ飛ばしてきた。

多分、お嬢様は俺が避けると思って投げたんだろう。速度も若干遅かったし。

でも俺はあえてそれを避けなかった。

バリントツ!!

陶器の割れる音と共に額に鋭い痛みが走り、飛び散った紅茶が俺の服を濡らす。

やっべ、ちよつと破片刺さったかも。顔から何か温い液体が垂れるのがわかる。

「あつ……」

どうやらお嬢様も我に返ったらしい。

短く詰まるような声をあげて、軽く口元を抑えている。

やはり人間血を見ると怒りが一気に冷めるといふのは本当らしいな。

「痛え…酷いつすねえお嬢様。自分が気に入らなければ、何やっても許されると。別に私は構わないですが、大切なティーカップに八つ当たりは良くないんじゃないですか？」

飛び散った破片は危ないので一つ残らず拾っておこう。万が一踏んで刺さったりでもしたら大変だ。

粉々に砕けたわけじゃないので、細かい破片が無いのは不幸中の幸いかな？

そんな事を思い、俺がそそくさとカップの残骸を拾う傍、お嬢様はただその場に立ち俯いている。

「(大方拾い終わったな…よし!)こんな夜遅くつまらないお節介焼いで申し訳ありませんでした。では、おやすみなさい。」

「……………あ、ちよ、ま……」

部屋を出ようとした瞬間、さつきまで威勢の良かったお嬢様の口から、震えた声が聞こえる。

だが、俺はその声に構わずドアを開き部屋の外へ足を進めた。すると、今度はしっかりとした声で彼女は叫んだ。

「ち、ちよつと待って！サトウ!!」

「なんですっ!」

「……、……めんな……さい。」

目を逸らし途切れ途切れになりながらもお嬢様はそう言った。
が、俺はそれを無情にそれを突っぱねる。

「割れたティーカップは元には戻りませんよ。」

「……っぐ……」

「そういうことです。では、今度こそ、おやすみなさいお嬢様。」

「ま、まって！サレ」

ボタン。

俺は静かに寝室のドアを閉じた。

…お嬢様。貴方は気づかなければならない。

いつまでも甘えていてはダメなんすよ。

確かに、今はそんなことすら考えられないくらい心も頭もぐちゃぐちゃになっているのだろう。

だが、自分が選んだ道を進む上で払う代償はしっかりと精算しなければならぬ。

俺もまだその返済する途中にある事を、改めて認識しながら……

覚悟と責任 後編

秋葉原。

そこは、日本有数のサブカルチャー都市であり、毎年多くの観光客が訪れるオタクの聖地だ。

最近ではスクールアイドル発祥の地としても名高いこの街は、同時に俺の古巣でもある。

ああ、駅を降りて感じるこの人だかりの熱気と脂汗混じったり芳ばしい匂い。全てが懐かしい。やはり数年ぶりの里帰りというものは気分が躍る。

「ふわあ…列車に揺られて1時間半。新幹線使うと沼津と秋葉って意外と近いもんなんすねえ。」

「…」

「お！あの店まだやってんのかあ。息が長いなあ。」

「……なんで…」

「ん？」

懐かしい情景に感慨深く浸っている俺の傍で、終始無言だったお嬢様が口を開く。

「……なんで私達、東京なんかに住るのよ!!」

「ああ、それは。以前にお嬢様が、『死ぬまでに東京見物した〜い♪』とかなんとか言ったのを明朝、ふと思いついてね。」

「ついこの間来たばかりよツ!!」

「いやでも大会の方が忙しくて、ロクに観光とかできなかつたでしょう?」

「嫌味のつもり??だとしたらサイっつターだわ!!」

うーん。昨日に負けず劣らず、今日もお嬢様は機嫌が悪い。
まーでも、昨日喧嘩別れした相手に朝っぱらから叩き起こされ、
半ば拉致するような形で東京まで連れてこられたら、そりゃ誰だつてこ
うなるか。

「まあまあ、お嬢様。そうカリカリなさらずに、とりあえず腹減りませ
んか？ 近くにいい店知ってるんすよ。」グイグイ

「shit!!」というかさりげなく手握らないでよ!!」

「じゃ、つべこべ言わずについてきてください。」

未だお嬢様との確執は取れてはいないが、そんなことは気にせず。
俺は久々の故郷の地を進んでいくのであった。

そんな訳で、ギヤーギヤー喚くお嬢様を引きずり歩き十数分。

ようやく目的の場所が見えてきた。

そこは昔。俺が中学く大学まで長い間お世話になった甘味処「穂む
ら」である。

毎日死ぬほどしごかれボロボロになっていた中、高の部活の帰り
道。

頭がパンクしそうな程のレポート課題を出され意気消沈していた
大学の帰り道。

心身共に疲れ果てていた時に食べるせんざいやあんみつは格別
だった。

穂むらの味は我が青春と故郷の味。そう言っても過言ではない。

「うむ。このとろけるような白玉に、鮮度の良い果実、そして餡子の絶

妙な舌触り。涙が出てくる程美味ですな。ね、お嬢様？」

「…」モグモグ パクパク

穂むらの看板メニューあんみつを2人で食べながら、俺がお嬢様に話しかけるもそんな事はどこ吹く風。

この金髪のじゃじゃ馬娘は、ヒヨイヒヨイとその可愛らしい口にあんみつを詰め込んでいる。

穂むらの甘味は、一度口に運ぶと器から無くなるまで手が止まらなくなってしまうものだ。こうなるのも無理も無い。

そんな彼女の姿を見ながら、ズズズと呑気に茶を啜っていると、不意にお嬢様がボソリと呟いた。

「ねえ、サトウ…」

「はい、なんででしょうか？」

「う…や、やっぱりなんでもない。」

あ？なんだよ。

そんな風に微妙に目を逸らしてそっぽ向くんじゃありません。

ラブコメじゃあるまいし…言いたいことがあるならはつきり言いなさいって。

まあ…言いかけた言葉は大方予想はつくけど。

「カップの件ならお気になさらずとも大丈夫です。」

「ッ!?で、でも！」

「執拗にお嬢様を煽りあささせたのは私ですからね。傷ならご心配なく、この通りなんともありません。」

「違うわ…例え傷が無くたって貴方に酷いことをした事実には変わらない。だから…」

ごめんなさい。

そう言いながら頭を下げたお嬢様に、俺は終始無言を貫いた。
しばらくの沈黙の後、お嬢様が恐る恐る顔を上げる。
ガタツ！

「すみませーん。お勘定お願いします。」

「はい。」

「さ、サトウ…！」

「お嬢様。行きますよ。」

「……」

そろそろ頃合いか…

穂むらを出て、しばらく空いた場所にある繁華街。その片隅にポツ
ンと立っている古びたライブハウスがある。

そこは、俺と望の思い出の場所であり、ここに来る事が今回の東京
来訪の理由である。

ギギギ…と相変わらず建て付けの悪いドアを開けるとブワツと
埃が立ち上がり、煤けた臭いが俺たちを包んだ。

この様子を見る限り、最近でもほとんど使われてないことが窺え
る。まあ、そりやそうか。

「サトウ…ここは？」

「ここですか？私が今のお嬢様に見せたかった場所ですよ。」

そう言って、俺は近くに倒れているパイプ椅子を拾い、ガチャガ
チャと組み立てお嬢様を座らせる。

よし、今日のお客が席についたところで、そろそろ本題に入ろうか。

「お嬢様、地下アイドルって言葉聞いたことあります?」

「え、ええ…確かメディア露出よりもライブ中心に活動してる人達の事よね。」

「まあ、一般的な解釈としては正解ですね。しかし、ここで言う地下は、少し差別的なニュアンスを含んだものの事を指します。」

綿埃がこべりついたステージをなぞり、その手についた埃をふつ！と吹き飛ばす。

吹き飛ばされた塵屑は薄い照明に反射しキラキラとあたりを舞った。

「この塵屑の様に、芸能界のド底辺に位置する多くのミュージシャン、バンド、アイドル達が夢を追い求めて足掻き躓いている場所。それがこのライブハウスです。」

「今キラキラと舞っている埃の様に、運が良かった者達は地下から這い上がり、地上の世界で輝くことができます。でも、そうでない者たちは、この地下に埋もれてゆくのが現実。」

「……何が言いたいのか?」

「前置きが長かったすね。では、簡潔に申しませう。」

もし、お嬢様達のスクールアイドル活動がこの地下で埋もれている様なアイドル達と同じ末路を辿ったとしても、やり抜く覚悟があるのかどうか?をお聞きしたかったんです。」

意地悪げにほくそ笑む俺の顔は、これ以上に無いほどに醜いだろう。そんな醜い笑顔を晒し、非情な現実な話を叩きつけるのには意味がある。

お嬢様が本当にそこまで覚悟して、スクールアイドル活動を行っていたか?

答えは言わずもがな…

「そんなの…やってみなきやわからないじゃない!!」

「やはり…思った通りでしたね。これじゃダメなものも当たり前だ。」

「な、何よサトウ！何が気に食わないの!!」

呆れた様に吐き捨てる俺に目を剥き食ってかかるお嬢様。

思った通りだ。今のお嬢様には覚悟のかの字さえありやしない。無垢で純粹すぎるその行動理念は、非常脆く儂いもの…それをまるで分かってないのだ。

「もつと噛み砕いて言いましたよ。お嬢様は自分がド底辺に突き落とされた時に、何がなんでも這いがる根性があるか？そして、足掻いたとしても必ず思った様な結果になる事は無いという認識を持っていらつしやるのか？。という事です。」

「そんなの…っ!?!」

「ようやく気づいた様ですね。ええそうです。ド底辺とはまさに今の状況。這い上がるのかと思えば、奥様や旦那様の言葉に臍を曲げて部屋に引きこもり、しまいには物に当たる始末。根性があるとは思えません。」

そして、思った様な結果というのはスクールアイドル活動で成功し浦の星を廃校の危機から救うという事。ですが、お嬢様が足を負傷する程努力しても、満足する結果は得られなかったはずです。」

「……っぐ……う……」

「厳しいことを言いますが、泣いて物事が解決するなら誰だつて泣き喚いてますよ。」

それに、何でも謝罪すればやってしまった事が帳消しになると思っているのであれば見当違いも甚だしい…そんな情けない貴女にスクールアイドルを続ける資格なんてありません!!」

「っ!?!……っつ」

俺の怒鳴り声に、お嬢様の嗚咽混じりの声が止まり、そのまま俯いてしまう。

つい、感情的になり怒鳴ってしまった。
そんなつもりで、言おうと思っただわけじゃ無いのに：口から出るの
はお嬢様の心を削る様な言葉ばかりだ。

ああ、そうか。

やっぱり俺は：

“こども冷静さを欠いてしまう程に” スクールアイドル”が嫌いな
んだ。

翌週。

俺は、空港の送迎デッキからつい先程、飛び立った飛行機を見つめ
ていた。

その後、東京から沼津へと帰ったお嬢様は、黙って奥様と旦那様の
いう事を聞き留学することに同意。

親子関係は若干改善した代わりに、俺とは一切口を聞いてくれなく
なった。

完全にお嬢様に嫌われてしまった事には心が痛むが、これでス
クールアイドルを辞めさせる事ができたのなら万々歳だろう。

見つめる飛行機が放つエンジンの轟音が次第に小さくなっていく

中、

ふと、背後から声をかけられた。

「サトウ thank you very much. マリーを説得してくれて助かりマシター。」

「あんなの説得でも何でもありませんよ。俺もお嬢様と同じで、お互いに溜まりに溜まった鬱憤をぶつけ合っただけです。」

「ケンカする程長い」という日本のコトワザがアリマース！それと同じデース！」

「ケンカする程仲が良いっすよ。おちよくってんですか？」

眉間に皺を寄せあからさまに嫌な顔をしながら奥様を睨みつけるも、動じる気配は一切見せない。

その肝の据わった態度を何故お嬢様の前では出来ないのか…と少々嫌味に思う。

「NO！そんなに熱い視線で見つめないで♪私は人の妻なのよーサトウ！」

「メンチ切ってんですよ。後、生憎年増には興味無いんで、ノーサンキューっす。」

「It's ^面 ^白 Funny ^冗 joke ^雑!! 今月の給料が楽しみネー♪」

うわあ…マジかよこのBBA。

雇用主特有の金に物言わせたマウントとか、俺以外の社員にやったらパワハラで訴えられるぞ。

あーあ、今月もタダ働きか。とほほ。

「No problem. サトウ。ちゃんとピンハネした分ボーナスは弾んでおきマース。」

「へーへー。まあ期待せずに待つとききますよ。」

「Oh！そんな事ないデース。十分期待に添える物だと思えますヨ
ッ。なにせ…」

ス・ク・ール・ア・イドルを作った”あの男”が貴方の友達”東條望”を意
識不明の重体まで追い込んだ決定的証拠が揃ったんだもの。」

第2章 2年ブウリデスネエー（アニメ本編）

小原家の使用人と新理事長!?

あれから、季節はめくるめく変わり、お嬢様が海外に留学されてから丁度1年と半年の時間が流れた。

沼津は相変わらず、まだ少し肌寒い風が内浦の土地を撫ぜ、雪解けの終わった大地からは動植物達が顔を出してきている。

さて、もう何年も見ているこの内浦の情景とは逆に、お嬢様不在のこの1年半、小原家に様々な変化が起きていた。

まず、最初に言える変化はなんも言っても旦那様の海外永住勤務確定のお知らせであろう。

お嬢様と奥様がホテルオハラにて生活していたが為、日本と海外を毎年かなりの頻度で行ったり来たりしていた旦那様。

その度重なる出国帰国シャトルランは、着実に彼の健康に影響を与えていた。

半年前に会社総出で行われた健康診断にて、不健康三種の神器とも呼ばれる「高血圧」、「高血糖」、「肥満」の各3項目で社内ワースト1位の最悪数値を叩き出し、保健所から精密検査のお達しを承った。

にもかかわらず、旦那様は「自分の体は自分がよくわかってるわい！」っと一蹴。

が、その1週間後、過労で倒れた。

社長自ら労基違反を犯していくというパワープレイに社員達全員が混乱する中。

比較冷静だった幹部職の方々と俺の提案で、仕事量の大幅な削減と当分の間帰国せずに治療に専念する事が決定。

なお当の本人は、病院に担ぎ込まれた次の日。旦那様は何食わぬ顔で腕に点滴チューブぶら下げながら、外資系企業との取引に行こうとしたらしい…

その鉄人過ぎる根性と体力には脱帽するが、もう少し体を労ってほしいものだ。

また、それに伴って奥様が、浦の星女学院の理事長を辞職した事も小原家に大きな変化といえる。

思い出してくれた方もいるかも知れないが、お嬢様の入学に合わせ浦の星の経営を担ってきた彼女。

合理的に物事を考える奥様の指導の元、浦の星は廃校へとの道を着実に歩んでいた。

が、海外仕込みの強引なやり方にPTAからの猛烈な反感を喰らい、満場一致で辞職させられたのである。

これだけ聞くと奥様が不憫に思われるかもしれないが、「コスパ重視で学校の土地売っ払って駐車場おっ立てマースー！」等の問題発言を連発してたので、因果応報だろう。

そりゃ、親御さんもOGもカンカンになるって…

まあ…というわけで、お二人仲良くズッコケかました為、小原家は新春早々過酷なスタートを切る事となってしまったのである。

そんな破綻寸前の小原家を建て直すべく、今日このホテルオハラに新た就任した理事長が到着するとの一報があった。

聞くところによると、旦那様から直々にお墨付きを頂いた敏腕経営家という話だが、一体どんな方なのだろうか？

そう俺とホテルスタッフ達が固唾を飲む中、ついに大広間にてその姿を現し……

「はあーい♡ Hello everyone!! みんな元気にして
たー? Mari's back home now!!」

……………はっ

数分後

「Hey! サトウ。 please give me tea!」
「1…2…3…5…7」ブツブツ

状況が分からず困惑したサトウは、素数を数えて落ち着きを取り戻そうとしていた。

とりあえず、混乱を収めるために、お嬢様にはリビングに移動してもらったまではいいが、これからどうすればよいだろうか……

(ま、まず最初にやるべきことは行方不明の新理事長を探す事だ。) 予定の時刻はとつくに過ぎていると言うのに未だにその方は現れない。

何か事故にでもあつてしまわたのか?と考えたサトウは理事長の安否を確認するべくリビングを飛び出そうとしたのだが……

「ねえーえ! サトウ! お茶!! ちよーだい!!」

「申し訳ありませんお嬢様。給仕の方はもう少しお待ちください。今

は、一刻も早く新理事長を探しに行かなくてはならないのです。」

「Why? 何言ってるの? 理事長なら貴方の目の前に居るじゃない。」

「え? 目の前…?」

「いやだから、私が、”理事長” なんだけど。」

「……」

目の前にいる金髪は何を言っているのでしょうか? 留学先から無断で帰国してきたのにも関わらず、そんな大ボラ吹ける彼女のメンタリテイは相変わらずと言ったところか。

いや、そんなくだらない事に感心している場合では無い。

とりあえず旦那様に連絡をとり、理事長捜索部隊を編成しなくては

…

ピツ・ポツ・パツ トウルルル

「あ、もしもし。こちら使用人のサトウです。旦那様いらつしやいますでしょうか?」

「やあ、サトウ。どうしたんだい? こんな時間に?」

「実は、まだこちらに理事長がいらつしやられていないんです。」

「え? そんなはずはない。さつき私の所に、マリーから到着したという連絡が入っているんだが…」

「……え?」

「ん? どうかしたのかい?」

「ま、まさかとは思いますが、理事長って、今こちらに無断で帰国なさられてグータラにくつろいでいやがる、太々しいパツキンのコトでは無いですよね?」

「その太々しいパツキンという言葉は少々引つかかるが、理事長はマリーだよ。…もしかして言っただけでなかったk…」

『社長お!? また勝手に病室を抜け出さないでくださいツ!! これは何回目ですか!!』

……あーごめんごめん。すまないが、これから仕事があるのでね。失礼するよサトウ。マリーの事をよろしく頼んだ。では……」

プチツ ツーツーツー

虚しい音と共に、国際電話が切れる。

サトウは吸うつと深呼吸をしたかと思うと、そつと胸ポケットにガラケーを仕舞う。

そして、7から次の素数を数えるべくその場に蹲るのであった…。

素数を数えて早1分。997から次の素数を導き出せなくなっていたサトウは、とうとう現実から逃避するのを辞めた。

向き直るとそこには、何がおかしいのかニマニマとこちらを見る鞠莉が1人。ソファにふんぞり返り彼を見下ろしている。

「ネーサトウ。さつきから1人でブツブツやってたけど気が済んだ？」

「あ、ありえねえ……おめえが理事長だなんて……」

「正直、祝ってもらえるとは毛ほども思ってたけど、そんな、この世終わりみたいな反応されると傷つくわ。」

しばらく濁りきった瞳でただ茫然と彼女を見つめるしか無かったサトウだが、素数を数えた事で脳味噌が活性化したのか、少しずつ状況が飲み込めてきたらしい。

なんとか落ち着きを取り戻し。サトウは質問した。

Q. 1何故お嬢様が理事長なんですか？

Q. 2 留学はどんなされたんですか？何かやらかしたんですか？

Q. 3 また乳がデカくなりましたね…あ、パッドで盛ってるんですね？見栄っ張りだなあ…

…と、若干取り乱しつつある従者の問いに鞠莉は冷静に答えていく。

「理事長になった理由は簡単よ。パパとママがやらかした分の損失を私が個人でやっていた株投資とFXで取り戻したの。で、その手腕を2人に認めさせて浦の星の経営を任してもらったって訳。」

「上の答え通り、浦の星に帰ってくるにあたって留学はおしまい。というより、留学先で学んだ経営学と経済学のおかげでFXと株で成果を出せたんだから、もう海外に居なくなっただっていいでしょ。」

「で、最後の質問。偽乳か巨乳か実際に触ってみる？」

ホラホラ〜と服をずらし胸元を曝け出す鞠莉にサトウは正気を取り戻したのか、真顔でかつ毅然とした態度でこう言った。

「あ、結構っす。」

「は!?!男の子ってこういうのが好きなんでしょ？なんでよ!!」

「俺は自分より一回りも年下のしかもJKに欲情するほど性癖拗らせちゃいけませんよ。あまり大人を舐めないでください。」

「そんなこと言っつ〜♪本当は触りたい癖にい〜」

「やめてください。サツサとそれのお下劣な胸をおしまいになってどうぞ。」

「サービス♪サービス♡」ズイズイツ!

「近い!そして寄りかかるな!!事案になったらどうすr…」

カシヤ!

……嫌な音が聞こえる。

咄嗟に音のする方を見ると、正面に見覚えのある一眼レフのカメラがご丁寧にこちらを向いて置いてあった。

眉をピクピクと痙攣させ俺が隣を向くと、お嬢様がムフフωと口を綻ばせながら意地悪く微笑んでいる。

なんだろう。とてつもなく悪い予感とロクでも無い事が起きそうな気がしてきた。

「な、何をなされたんですお嬢様？」

「淫らな姿のJKに寄りかかられるタキシードの男性の写真。なーんか想像力書き立てられる一枚だとは思わない？」

このアマあ：写真を盾に脅迫するつもりかよ。

はっ!?まさか、また俺に無理難題ふっかける気じゃ……（絶望）

とは言っても、まだ慌てるような時間じゃ無い。俺にはこの状況を逆転できる術がある。

思い出してくれ、むかーしむかし、奥様のババ臭い下着を俺の牙城にばら撒かれ、社会的に抹殺されかけた時。

俺を救ってくれた相棒。ボイスレコーダーちゃんだ。

今回お嬢様の突然の登場に、脳内の危険信号が鳴りっぱなしだった為、あらかじめつけておいたのが幸いだったぜ。

「……へへ、お嬢様も学習しませんね。俺がボイレコを常備していることを忘れているとは……ッ!？」

あ、あれ？確かにさっきまでポケットに入ってたはずなのに!？」

冷静にガサゴソとポケットというポケットを弄るがボイレコは見つからない。

「もしかしてだけど、お探し物はコレかしら？サトウ？」プラーン
「なっ!?!いつの間にもスリやがった!?!」

「貴方がブツブツ素数数えてた時、ポツケから物騒な物が見えたから、回収しといたのよ。ちなみに、このカメラもその時セットしたものよ。うふふ、学習してないのは果たしてどっちかしらね？」
「ぬ……ぐう……」

俺のボイレコを片手で弄び、ちやつかり一眼レフまで手元に回収していたお嬢様は、俺を完封してご満悦の様子だ。

畜生…思考停止していた隙をつかれるとは…ぬかったわ。

最早なす術なく立ち尽くす佐藤に、鞠莉は真剣な眼差しで彼を見据える。

そして、ふうつと一息ついたかと思うところ切り出した。

「茶番はコレくらいにしましょうサトウ。貴方に頼みたい事があるの。」

「なんです？…また面倒事の片棒担がされるのはゴメン被りますよ。」

「察しがいいのは相変わらずだね。でも、今回はそうじゃ無いわ。」

「と、言うとか？」

「貴方には黙って私のやることを見届けて欲しいの。結果が良かろうと悪かろうと目を逸らさずに…ね。」

「……………了承しかねます。」

「あら？…どうして？…理事長の座についたのは逃げ場をなくす為。2年前の一介の生徒だった私とは責任の重さは段違いよ。」

「こうまで腹括っているのに貴方は何故、私のやることを見届けてはくれないのかしら？…」

「それは……………」

急に言葉に詰まるサトウに、鞠莉はズイツと近づく。そして彼の顔を下から見上げ、逃げられないように両手でガシツツと掴んだ。

「な、何をするんです！と慌ててサトウは彼女を引き離そうとするが、思ったよりも力が強く振り解く事が出来ない。」

「サトウ…」

「…本当に…やめ…」

真っ直ぐに射抜かれるその視線に、思わず顔を背けようとするが、鞠莉の手の力は緩まない。むしろさつきよりも強くなっている。

「大丈夫だからサトウ。」私を信じて」

私を信じて

わたしを信じて

…たしを信じて

ぼ…しを信じて

ぼくを信じて

『僕を信じて』

「…っ!？」

鞠莉の金色の眼が彼の記憶の奥底にあった親友の眼とダブリ、偶然にも彼女の言葉が親友の言葉と重なる。

瞬間、体全身に力が入らなくなりサトウはその場にストーンと崩れ落ちた。

「だ、大丈夫!? サトウッ!!」

突然その場にしゃがみ込んだ使用人の姿に、鞠莉は慌てて声をかけ手を差し伸べるがサトウはその手を優しく払った。

「……す、すみません。ちよつと貧血を起こしてしまつたみたいで：今日のところはこの辺で。お嬢様も長旅でお疲れの事ですし、この話はまた今度にもしましょう。」

そう言うと、サトウはゆつくりと立ち上がりぎこちない笑顔のまま、「申し訳ありません。」と逃げるようにリビングを出て行った。

「やっぱり…パパとママから聞いた通り。サトウの心の中にはトージョーノゾム^{東條望}がまだトラウマとして残ってるのね…。」
「でも、サトウ。私は”彼女の様”にはならないから。だから心配しないで…見届けて欲しいのよ。」

使用人の出て行ったりリビングの片隅で、小原家令嬢は一人そう呟くのであった。